《書　評》

ブラジルのフランス愛国者，ベルナノス

Sébastien Lapaque, *Sous le soleil de l'exil : Georges Bernanos au Brésil 1938-1945*, Grasset, 2003

北　原　ル　ミ

2001年5月31日，人影もまばらなリオ・デ・ジャネイロの空港に降り立ったのは，セバスチャン・ラパック氏だ。56年前，1945年の同じ日に，ジョルジュ・ベルナノスは第二次世界大戦の時期とほぼ重なる7年間のブラジル滞在に終止符を打ち，フランスへ帰国する船に乗ったのだった。感慨にふけりながらラパック氏がホテルにたどり着くと，受付のボーイはフランス語が話せただけでなく，ベルナノスの名を知っていた。リオ市内の「公立ジョルジュ・ベルナノス小学校」に通っていたのだという。作家が半世紀以上も前に残した足跡を求めてはるばるブラジルへ飛んできたラパック氏は，このできすぎたような旅路のはじまりによって，すでに高くまいあがろうとする気持ちを抑えきれない。

これは，『亡命地の太陽の下で—ブラジルにおけるジョルジュ・ベルナノス　1938－1945』冒頭のエピソードである。著者のラパック氏は『フィガロ・リテレール』誌の批評欄もつとめる小説家で，ベルナノスの大ファンであるらしい。すでに『ベルナノスをもう一度』（*Georges Bernanos encore une fois*, L'Age d'Homme / Les Provinciales, 1998; Actes Sud, «Babel», 2002）というエセーを出している。今度の本も研究書として書かれているわけではなく，引用は多いが注もレフェランスもほとんど記されていない。前著が純粋にベルナノスの「声」をまとめて演出したものだったのに対し，今度はよりドキュメンタリー風であり，著者はベルナノスの住んだブラジルの地を訪ね歩き，その場所の空気を吸いながら，作家を直接ないし間接的に知っている人々の証言を聴取し，またベルナノスのテクストに耳を傾ける。というわけでこの書は，ベルナノスがブラジルに生きて書いていた様子をなかば伝記的に再構成してゆきながら，同時にその意味を問うというかたちをとっている。

ベルナノスのブラジル時代については，もちろん伝記の一章分としてはある程度のページが割かれてきたし，短い研究論文は今までにもあったが，これだけをとりあげるまとまった著作というのは，研究にしろ批評にしろ，じつはあまり見られなかった。

これには理由がある。まず第一に，ちょうどその時期に執筆されたベルナノスのテキストの多くが，ブラジルの新聞などに発表されていた時事的文章だったため，いくつかの単行本にはなっていても全体としてまとまったかたちでは読みづらく，それらを丹念に整理し校訂したプレイヤッド版『エッセーと闘いの書』第二巻（Georges Bernanos, *Essais et écrits de combat*, II, Gallimard, «Pléiade»）が刊行される1995年を，一般の読者は待たねばならなかった，という事情

である。第二には，とくにフランスがドイツ占領下にあった1940年から1944年にかけて発表されたものについては，その内容からヴィシー政権や全体主義を果敢に批判した，一種のフランス・レジスタンス作品として分析対象となるが，それらが実際に書かれた「ブラジル」という場所への関心は，単なるひとつの「環境」（かなり変わった「環境」であることは間違いないが）への好奇心の域を越えるものではなかった。ブラジルにおりながら，またそこに骨を埋める覚悟でありながら，その目はつねに祖国フランスの方を向いていたベルナノスの姿勢からも，それ以上のなにかを引き出すのは難しく思われていたのだ。彼が南米に出発する前，1933年から1937年まで滞在していたマジョルカ島では，当地のスペイン戦争にまきこまれたことが劇的な『月下の大墓地 *Les Grands Cimetières sous la lune*』発表につながっただけに，ブラジルでの，見た目は平穏な生活の方は注意を引きにくかったといえるかもしれない。

ラパック氏は，なにゆえに自分がベルナノスのブラジル時代をとくべつにとりあげるのか説明はしない。ただ，海辺のリオ・デ・ジャネイロから北の内地へのびる鉄道に沿って，イタイパーヴァ，ジュイス・デ・フォラ，ヴァソウラ，ピラポラ，バルバセーナと，引越しのたびごとにミナス・ジェライス州の奥へ少しずつ入り込んでゆくベルナノスの足取りを追いながら，各地で書かれた主要な作品をつぎつぎに提示してゆく。その提示のしかたで，作家ベルナノスにとってのブラジル時代の重要性がおのずからあきらかになるのである。ミュンヘン協定の衝撃のなか，フランスの右翼を徹底批判する『真実の躓き *Scandale de la vérité*』『われらフランス人 *Nous autres Français*』，「奇妙な戦争」をブラジルの田舎から眺めた『辱められた子供たち　1939－1940年の日記 *Les Enfants humiliés Journal 1939-1940*』，ベルナノス小説のうちで最高傑作といわれる，謎めいた『ウィーヌ氏 *Monsieur Ouine*』，ヴィシー政権批判から文明批判へのひろがりをみせる『イギリス人たちへの手紙 *Lettres aux Anglais*』，『「魂たちの十字架」の道 *Le Chemin de la Croix-des-Âmes*』『ロボットたちに対抗するフランス *La France contre les robots*』――これらの作品のそれぞれが，ベルナノスが大西洋を越えこの南の国まで抱えていった様々な「結び目」――政治上，思想上，創作上の問題――をひとつひとつほどいてゆく試みとしてとらえられている。そして，この地がほかのどこでもなく「ブラジル」であったがゆえに見出された道筋を，著者は探ろうとつとめているのだ。

そもそもベルナノスがブラジルに住むことになったのも偶然だった。王党派カトリックでありながらフランコ派や教会を激しく批判してしまい，ヨーロッパに自分の居場所がなくなったと感じたとき，パラグアイにフランスのコロニーを作るという若い頃のロマンティックな夢を思い出し，一族郎党を引き連れて旅立ったのである。荒れ果てたパラグアイに幻滅したためにとなりのブラジルに移ったのだが，しかしこの南米への出発自体に，ラパック氏は，16世紀に「南極フランス」をつくったニコラ・ド・ヴィルガニョンや17世紀の「赤道フランス」のダニエル・ド・ラ・トゥーシュ，19世紀サンタ・カタリーナにフーリエ主義の協同組合社会をつくったジュール・ミュールなどの名を挙げて，「栄光ある」コロニアリストの発想と，社会主義的ユートピア「理想の村」の夢想との，ベルナノスにおける混合を指摘する。本人がこれらの先達をどれだけ意識していたかはさておき，1938年にあっては，たしかにベルナノスにしかありえないような考

えである。

また，ラパック氏は，ベルナノスならではのブラジル史との出会いを掘り起こす。1912年，パラグアイを夢見ていたのと同じ若い頃，「王党派新聞売り」ベルナノスはポルトガルでの王政復古クーデターの企てにとびこもうとするが，事前にアクション・フランセ―ズの指導部に知られ，厳重注意を受けたことがあった。無謀なクーデター計画も泡と消えた。ところで，ユーグ・カペーの血をひくこのポルトガル王家からこそ，1822年のブラジル独立でブラジル王となったペドロ一世が出たのである。その息子のペドロ二世は比較的安定した統治をおこない，1888年には皇女イザベルにおされて奴隷制廃止を宣言したが，その宣言に不満な大農園主たちの起こした革命によって，1889年共和政となったブラジルから追放される。ベルナノスがのちに同情をよせたこのペドロ二世の屋敷は，じつは作家が1939年に数ヶ月住んだヴァソウラのすぐ近くのペトロポリスにあった。1920年に追放令が解かれて屋敷に戻っていた孫を，ベルナノスは何度か訪問したという。それだけではない。その孫の娘，つまりペドロ二世のひ孫にあたるイザベルは，まさにフランス王位継承者とされるパリ伯アンリ・ドルレアンと結婚してベルギーにいたのであり，1939年の春にペトロポリスへ数日滞在し，ベルナノスとも会っている。このパリ伯とはベルナノスはすでに1928年に会っており，その出会いに鼓舞されてフランス王家への情熱を謳いあげるような記事「フランスの家にクリスマス」を書いたこともあった。

身近なところに暮らすブラジル王家の末裔との出会いにより，かつて自分が手を貸すことを夢見たポルトガルのプリンス，マヌエル２世を思い出し，またかつて自分がフランスの希望を託そうとも願ったパリ伯への期待をよみがえらせたという指摘は興味深い。実際，想像上の「プリンス」への呼びかけは，ヴァソウラで執筆された『われらフランス人』のなかにもっとも色濃くあらわれており，「モーラスの近代的な装いをとりはらった自分なりの王党主義によって，この時期のベルナノスの政治性は深く詩的なものであった」ことはまちがいない。なお，ラパック氏はイザベルにもパリ伯にも，90年代に会ってはなしをきいたという。後者に対しては，その後ヴィシー政権に対してあいまいな態度をとり続けるパリ伯に業を煮やしたベルナノスが「こんな王位継承者は，銃声一発で迎え撃ってやるのがよきフランス人のつとめであろう」と1944年に書いたのを知っているか，などと質問する意地悪さもみせる。

話が王族末裔との関係だけに限られるならばスノッブな逸話としておわってしまいかねないが，ラパック氏はもう一歩先へすすみ，20世紀初頭のブラジル農民の間に広がっていた，「どこかに隠れている王様がいつかあらわれる」というセバスチャン主義の存在にも触れている。これは，16世紀モロッコへの十字軍遠征に出たまま遺骸の見つからなかったポルトガル王セバスチャンが，どこかで生き延びていて正義を実現しに帰ってくるという民間信仰で，ポルトガルからブラジルに伝わったものだったが，1912年から1916年にかけては，そこから「大農場主たちの共和政」にたいして「君主国」をたちあげようという「聖なる村々」の動きが南部に生まれたことは，シッコ・アンカレール，ルシア・カルピ，マルクス・ヴェニシオ・リベイロ著の『ブラジルの歴史　ブラジル高校歴史教科書』（東明彦，アンジェロ・イシ，鈴木茂訳，明石書店，2003年）でも述べられている。ブラジルの農民の姿に，失われたフランス農民の姿を重ねて見ていたベルナ

ノスの想像力へ迫るものであったろう。当時はファシズムの影響を受けたヴァルガス独裁政権下のブラジルで，むしろこれを批判しようとする民主主義者，共和派の知識人たちとベルナノスが密接な交友関係を結んだことは知られているが，ブラジルのより大きな歴史的文脈をふまえて，もう一度彼の位置を検証してみるのもおもしろいのではないかと考えさせられる。

ほかには，『未来の国　ブラジル』を書いた亡命ユダヤ人シュテファン・ツヴァイクとの出会いが，ベルナノスの「反ユダヤ主義」問題にどう作用したかとか，ブラジルの教会やフランス人共同体との関係，そしてもちろんレジスタンスの拠点「自由フランス」との関係などの問題についても，ラパック氏はもらさず目を配るものの，それほど新しいことがらは述べていない。

興味深い点がもうひとつあるとするなら，ブラジルを「祖国」と呼ぶようになっていったベルナノスが讃えるのがその人種の混交であり，ブラジル国家を支える「同化」の思想がフランスのそれと同じものであると強調するベルナノスの論理をとらえている点である。それに戦争終結後，ド・ゴール将軍からの呼びかけに応じるかたちでためらいつつフランスへ戻ったベルナノスに代わって，その子供たち六人のうちの三人，つまり約半分がブラジル人と結婚し，その子や孫によって「同化」が実践されたという事実を思い起こさせるのだから，大変な説得力だ。ただ，この「同化」の思想を，どうせならば初めに名を挙げたヴィルガニョンなどのかつてのフランスからの植民者の思想とつき合わせてほしかったが，それはないものねだりだろうか。おりしも，2001年度ゴンクール賞受賞作であるジャン＝クリストフ・リュファンの歴史小説『ブラジルの赤』（野口雄治訳，早川書房，2002年。Jean-Christophe Rufin, *Rouge Brésil*, Gallimard, 2000）が，まさにヴィルガニョンの「南極フランス」を舞台としており，少々図式的な点もあるにしろ，「一つの文明が別の文明に根をおろす」ときの様々な矛盾や葛藤を描き出そうとこころみている。ベルナノスの「ブラジル」についても，そのような視点から追求できることはまだまだありそうだ。

以上のように，本書は，ブラジル時代という一つの有機的な枠組みの中でベルナノスを読むことの意義をわからせてくれる。そして「小説家ベルナノスが時事的なものを書き散らすようになってしまった」，と否定的にとらえられることも少なくなかったブラジル時代が，逆にどれだけこの作家にとって豊かな熟成の時期であったのかについて，具体的なイメージを与えてくれるのである。ただし，ベルナノスの抱える矛盾についてはあるいは少々きれいすぎるかたちで解決させてしまう向きがあるのも否めない。全体的に見ると本書は，ラパック氏がたいそう信心深く巡礼の旅を行ったのだという感想を抱かせてしまうかもしれない。さらに言うなら，ブラジルや，ブラジル人をもベルナノスの目で見ようとしているとの批判もなされうるだろう。むろん，現在の街を描写しながらベルナノスのいた頃との違いを挙げたり，サッカーのワールドカップがいかに現在のブラジル人のアイデンティティー形成に役立っているかに気づいたりはしている。しかし基本的に，小説家でもあるはずのラパック氏自身の目がとらえたブラジルが，もし背景の書き割以上にもう少し生き生きしたものであったなら，逆にベルナノスの輪郭も時間を越えてさらに際立っただろう。あるいはベルナノスに対してもう少し冷静に距離をとっていたなら，作家のテクストを読みなおすおもしろさも増したであろう。本書はベルナノスをまったく知らない人にも

たいへん読みやすいと同時に，研究者にも教えてくれるところのある内容を備えているが，そのような点で中途半端なのが残念といえば残念である。しかし，「ベルナノスのブラジル時代」，というだけでなく，むしろ「ブラジルのベルナノス」という広い開拓地に自らおもむき，今後耕すべき地点をいくつか指し示してくれただけでも，十分であるともいえる。